

まよい

平成二年度 六年女児

「十月四日にミーティングを行ないます。そのときまで今、六年生の人は、水泳をやめるかやめないかを家の人と話し合って来てください。」先生がそういったときわたしは、一瞬、今すぐにもやめてしまいたい。こんなところ早く出て行きたいという気持ちらが頭にうかびました。けれど、家の人と、以前から話し合って、六年生の最後、三月までは、ぜったいに続けると決めていました。

十月四日の日、わたしは、そのまま続けて、三月になったらやめると話すことにしました。けれど、先生の言葉で、どうしようかと迷ってしまいました。その言葉とは、

「もうすぐやめる人は、下のクラスに下がってもらいます。それではないと、続ける人の決心がにぶってしまふので悪いえいきょうをあたえてしまうのです。」と言うのでした。わたしは、三月までは続けたいけれど、下のクラスに行くのだったらすぐにやめた方がいいと思いました。

先生の話を聞いて、やめてしまう人はたくさんいました。でも、わたしはどうしようか迷っていました。すると、先生は、全員にこんな話をしました。

「何かをしている人には、かならず山があります。君達は、まだ山に登る準備をしてきたに過ぎないのです。たしかに、今までも、山を乗りこえて来ただろうけど、まだまだ山はたくさんあるのです。最後の山の頂上、そこに着いたとき、オリンピックの優勝者になれるのです。優勝するには、今からでもおそくはないのです。」

このせりふを聞いたとき、はじめは、先生達がやめないでほしいと言っているだけだと思いましたが、よく考えるとそうでもないことに気が付きました。とちゅうで、種目をかえても、今までどおりに一位になることができるかどうかわかりません。それに、中学校に入ると、もう体力作りのための水泳でもありません。競技のための、勝つための水泳なのです。このことを考えたとき、やっぱり、水泳をやめたいという気持ちが強くなります。

わたしは、今までの事を、ふり返ってみました。レベルの高い大会、数々の賞状とメダル。小学校最後の学童大会

で、リレーも個人種目も二位という成績を残せました。これも全部水泳教室の先生方のおかげなのです。水に顔もつけられず、ましてや何メートルも泳ぐことのできないときから八年間、先生方は、熱心に指導してくださったのです。そのため、学校では、泳げないからと言って苦しむこともありませんでした。

水泳は、わたしにたくさんのことを教えてくれたのです。苦しいことや、いやなことにたえ、自分の力で勝つということを見せてくれました。長い年月をがんばってやり通すことがわたしにはできるということも教えてくれました。今は「いやだ。やめてしまいたい。」と言っているわたしでもそういうことを考えると、すぐにやめてしまいうことができないのです。水泳教室には、八年間もの思い出がぎっしりつまっているのです。こんなふうに考えると、やめてしまうことはとてもできないのですが、中学に入るとそうもいかなくなるのです。中学生の姉は、いつも

「それ期末テストだ。それ中間テストだ。」と、勉強がいそがしいのです。それを見ていると、毎日、水泳をやっ

いては、一時間も二時間も勉強をしていると体が持つかどうかわかりません。

あれを考えるとこれが問題になり、これを考えるとそれがだめになるというふうに、水泳を続けるかやめるか、なかなか決心がつきません。やめたい、今までのことを考えるとやめられないということが、わたしの頭の中でぐるぐるかけめぐっているのです。